

《論 文》

起業家精神の形成と教育に関する言説

尹 敬 勲・全 福 善

The Theory and Structure about the education of the entrepreneurship

KAEUNGHUN YOON, BOKSUN JEON

キーワード

起業家精神 (entrepreneurship), 社会的企業 (social entrepreneurship), 起業を実践する意志 (entrepreneurial intention)

はじめに

イリノイ大学の経済学者のD・N・マクロスキーは、自由競争資本主義を成功に導いた最も重要な要素は、起業家精神とイノベーション、自由、そしてビジネス関係者たちへの尊重であったと主張している。自動車やガソリン、インターネット、飛行機など、世界を大きく変貌させた発明は、私たちが気づかないうちいつのまにか生まれたものであり、政府の命令で作られたものでもない。それも、これもが膨大なイノベーションなしには不可能だったということである。要するに、自由競争資本主義は、政府の強制ではなく、企業の自由なビジネスの中でイノベーションの結果だということだ。そのため、自由競争資本主義において起業は最も重要なファクターであることを意味し、自由競争資本主義それ自体は、社会変革をもたらす要素であると評価されてきたのである。さらに、現代社会における英雄とは誰かと問いかけた時、それは富の創造者、つまり起業家であった。起業家こそが、真に高潔な道を歩み、竜悪を懲らしめる正義のヒーローのごとく、大胆で愛すべ

き存在として君臨している存在のように言われた (ジョン・マッキー・ラジェンドラ・シソーディア2014, p.20)。少し大げさに聞こえるが、起業というのは、資本主義社会において社会変革を促す最も重要な活動であると理解できる。

しかし、毎年、大学に入学する新入生と話をすると、多くの学生が公務員、教師または大手企業に働くことを希望している。それで、公務員、教師や大手企業の社員を希望する理由を聞くと、これらの職種は安定的だということである。特に、公務員や教師になれば、定年まで働けるということで安心できるという。個人的に若い人たちからこのような話を聞くと、力が抜ける感がどうしてもある。大学生になったばかりで、これから少なくとも4年間、色々なことを学び、挑戦することが出来るのに、直ぐ安定の道を選ぼうとすることはもったいないような気がする。

しかし、海外に目を向ければ、グーグル (Google)、フェイスブック (Facebook) を始め、大学時代に起業に挑戦した若者の成功した事例が数多くある。そのような例をみると、やはり起業へ関心を示す大学生が増えれば良いと、個人的に思ってしまう。勿論、公務員や教

師になり、地域社会や子どもの教育に情熱を注ぐ若者の選択肢を否定することではない。

但し、起業という要素には、必ずしも起業した会社の名前が知られたり、大きな収益をあげる会社に作ることだけが目的ではなく、起業という言葉に内在している挑戦や情熱という抽象的な意味合いを若者の内面に形成する効果がある。すなわち、若者に対して起業に関心を持たせ、挑戦したいと思う意識を形成することが、若者が安住しようとする意識から脱皮し、より積極的に取り組む意識を形成することに繋がると、個人的に思うからである。

本論文は、若者が現状に安住しようとする意識から、より挑戦しようとする意識へ変えるための起業家精神を形成する教育の可能性を検討することが必要だと思う。ただし、その前にその根拠となる既存の起業家精神の研究動向を把握する。

1. 起業家精神の定義

起業家精神 (entrepreneurship) は、ビジネスの機会の追求を中核とする新たな考え方であると同時に、アプローチであり、行動と実践を伴うプロセスである。そして、過去30年間、経営学の中で独自の領域で発展してきた。起業家精神は、学術的研究に留まらず、ビジネスの実践的分野でも発展を遂げ、アメリカをはじめとする多くの国で、国の経済と社会の発展の原動力としての役割を果たしてきた。

起業家精神と関連した議論を進めていく中で、先駆的論点を提示した研究者はシュンペーターである。シュンペーターは、新たな生産方法と商品開発を技術革新と規定し、技術革新を通じて創造的破壊 (creative destruction) の先頭に立つ革新者を起業家として捉えた。具体的に言えば、シュンペーターは、起業家という革新者の要件として、新製品の開発、新しい生産方法の導入、新しい市場の開拓、新しい原料や部品の供給、新しい組織の形成、労働生産性の向上という6つの要素を備えなければならないと

主張した。この要素に、将来を予測することができる洞察力と新しいことに果敢に挑戦する革新的で創造的な精神を備えていれば、革新的な起業家の要件を満たしていると説明している (シュンペーター 1998)。

シュンペーターが革新的なで創造的な精神を持つ人を起業家として捉えた後、起業家精神について重要な見解を述べた研究者はColeである。Coleは、起業家精神に関しては、新たな結合を実行する革新性に加え、利益志向のビジネスを展開するために管理が重要であると指摘し、革新的管理を新たな要素として追加した。革新的思考、管理および外部環境の調整という要素が、起業家精神を形成する上で必要な要素であると捉えた (Cole 1959)。その後、多くの研究者は、Coleの視点に基づき、革新的思考、管理および外部環境との調整を担う能力を形成させるのが起業家精神の核心であると定義した。

実際、Coleの流れを継承しているStevenson & Jarilloは、起業家精神について、新しい機会を逃さず、積極的に実現していくという戦略的な側面から起業家精神を定義している。また、Dess et alは、起業家精神を二つの段階で区分して定義している。

第一段階は、既存の組織内で新しいビジネスを誕生させることである。第二段階は、新たな次元へ成長するために、組織内で戦略的な刷新を通じて組織を変化させることを意味する。この定義によると、組織が創業した時期から少し時間が経つと、新たな機会を追求することになるが、この新しい機会を追求する時、その過程で起業家精神が形成されるということの意味する (Stevenson & Jarillo 1990)。このように起業家精神の定義は、似ているようで少し異なる別の意味を持った形で変容されているが (Dollinger 1995)、今日に至っては徐々に実践的な意味を重視し、理論ではなく、実践分析の中でその意味で捉えている。例えば、Stevenson, Roberts & Grousbeckは、起業家精神を現在置かれている状況と環境に拘らず、今後起こりう

る機会を掴むことであると把握した (Stevenson, Roberts & Grousbec 1989)。また, Timmons は, 起業家精神を事実上, 無から新たな価値を創造するプロセスであると把握しながら, 起業家はリスクを背負うが, それに相応する補償を期待し, あらゆる制約の中で新しいビジネスの機会を獲得し, 新たな価値を創造していく過程であると定義した (Timmons 1994)。そして, 2000年代に入り, Kuratko & Hodgetts (2004) は, 起業家精神は企業の持続的成長を左右する原動力として捉え, 企業の将来を左右する重要な要素として把握した。

このように, 起業家精神はビジネス環境の変化の中で多様な形で定義されてきた。しかし, これまでに定義された内容を包括的に言えば, 起業家精神とは, 急速に変化するビジネス環境の変化の中で, 現在起業が有している資源や実績に留まることなく, 革新性, 実行性, リスクを乗り越えようとする意欲を持ちながら, 新たな価値と機会を獲得するために絶えず挑戦する精神であると同時に, 企業の成長と発展に実質的に貢献できる態度と力量として定義できる。

2. 起業家精神の実現形態

次に, 起業家精神はどのように実際のビジネスの現場で具現化されてきたのだろうか。まず, 起業家精神の概念を再度確認すると, 起業家精神は, 変化と革新を導く中核的要素として, 新たな機会を継続的に求めていくとともに, これから成長いくと思われるビジネスモデルを発掘し, 新たな事業形態と管理方法を根本的に再構築していく。さらに, 新しいビジネスの機会を獲得するために, 果敢にリスクを取って, 未来志向的な視点で, 環境の変化に応じて挑戦していくことであった。そして, これらの定義は, 最近「entrepreneurship (アントレプレナーシップ)」という用語で表現されるようになった。Brushによると, 「entrepreneurship (アントレプレナーシップ)」は, 二つの意味を持っていると言われている。

まず, 一つ目の意味として, 「entrepreneurship (アントレプレナーシップ)」は, 起業というものを新しい組織を作る過程として捉えた。ビジネスの機会を見つけ, その機会を活用する計画を策定し, 計画を実行し実現させる上で必要な資源を動員し, 価値を創造しようとする強い意志を持って, リスクに対する適切な管理を行うプロセスであると把握した。具体的に言えば, 起業家としての能力や意識を備えた個人や集団が, ビジネスのアイデアを持ち, 事業目標を立て, 適切なビジネスの機会を見つけ, そのタイミングで資本, 人材, 設備や原材料などの経営資源を確保し, 企業または法人を設立することを意味する。

二つ目の意味としては, 起業家精神という言葉として解釈されているということである。「entrepreneurship (アントレプレナーシップ)」を起業家精神として解釈する理由は, 企業活動とは, 本来, 起業家の特殊な条件, 資質, 能力, 性格, 動機などが複合的に結合して表出されるものである。そして, 起業家精神は, 事業を実践する中で行動として表れたものである。特に, ここでいう「entrepreneurship (アントレプレナーシップ)」の意味が近年注目されている。その理由は, 従来, 起業というものが2000年の初めに起きたITやBT産業のように, 技術力を活かした先端産業や大企業に注目された時期を過ぎ, 小規模な市場でビジネスを展開している新興企業, サービス業を主とする企業においても, 起業家精神に対する関心が高まり, 起業家精神の重要性が徐々に台頭しているからである。その結果, その重要性は, ビジネスの現場だけでなく, 国や社会においても起業家精神が果たす役割が議論されるようになった。例えば, Shaperoは, 国または地域経済が低迷から脱する上で必要な回復力 (reliance) と自己革新のような特性を保持するためには, 起業に対する意志を持っている潜在的起業家の役割が重要だと強調した (Shapero 1981)。要するに, 起業を実現可能とする機会が与えられ, 起業家的な素質を発揮し, 起業と関わる行

動を実行していこうとする起業家たちの存在が増えると、地域社会と経済、さらに国全体に至り、弾力性が生まれ、地域が活性化するということである (Bygrave 1993)。

上記の記述から見られる起業家精神を実現形態の側面から見ると、起業家精神とは事業を立ち上げて具体的に実現していく過程という側面もあるが、地域社会や経済、そして国家の革新を導く革新的な性格を内在している側面もあると理解できる。そのため、ビジネスの現場を超えて、地域社会や国に至るまで、全体的に活性化させる潜在的可能性を持っている起業家精神の実現がより重視されているのである。それでは、起業家精神を実現していく上で、起業家精神を形成する方法を模索する前に、起業家精神はどのような構成要素を内在しているのかを、次項で確認する。

3. 起業家精神の構成要素

起業家精神を構成する重要な要素を把握する上で、従来の研究の傾向は起業家の行動と関連させて捉える形態である (Dollingers 1995)。例えば、Millerによれば、起業家精神を持っている経営者の特徴は、製品市場の技術革新に参加して、リスクを背負いながらも積極的な投資を行い、能動的かつ積極的経営を通じて、競争相手に比べて競争優位の地位を確保していることであると捉えた (Miller, 1983)。そして、このような具体的な起業家の行動に基づき、起業家精神の構成要素を、革新性 (innovation)、進取性 (proactiveness)、リスクテイク (risk-taking) と区分した。また、Covin & Slevinは、成功している企業であればあるほど、リスクを積極的に取りながら、企業の競争優位性を確保するために、技術革新と変化を好み、他の企業と積極的に競争するのに積極的であると分析し、起業家の戦略的な態度と姿勢として把握した (Covin & Slevin 1989)。それでは、「革新性 (innovation)、進取性 (proactiveness)、リスクテイク (risk-taking)」という三つの構

成要素を個別に確認してみよう。

第一の起業家精神の構成要素は革新性である。初期の研究において「革新性」についての定義を見ると、日常的な活動から抜け出し、すべての物的要素と力を新たに結合させ、起業家によって実行されるものと説明されている (Schumpeter 1934)。しかし、時代が変化することによって、革新性は市場のニーズに合うアイデアを見つけ、そのアイデアをビジネスチャンスとして活用する過程で、製品のデザイン、市場調査、広告などを積極的に推進する経営活動として定義されるようになった (Covin & Slevin 1991)。これらの時代的变化を踏まえた上で、通説的に言われている革新性の意味は、市場環境の変化に積極的に関わり、市場の不安定性と不確実性を克服し、新しい技術や知識などの導入に積極的であるとともに、新たな取引先の開発を通じて、革新的な製品開発とコスト削減のために積極的に取り組んだ自発的な行動だと言える。

第二の起業家精神の構成要素は、リスクテイク (risk-taking) である。リスクテイク (risk-taking) は、古くから起業家精神の核心的要素であると言われて来た。200年以上の前から、既に起業家たちは、自分の資本でリスクを取り、貿易をする人として定義されてきたのである。また、不確実な結果が予想されるにも関わらず、果敢に挑戦しようとする経営者の意志を意味し、リスクを楽しむような心理的尺度として理解されてきたのである (Sexton & Bowman 1991)。端的にいえば、リスクテイク (risk-taking) は、挑戦する意識の土台となる構成要素として理解されてきたと言える。

第三の起業家精神の構成要素は、進取性である。進取性とは、市場 (マーケット) における競争相手に対して積極的に闘っていこうとする気持ち、優れた成果を挙げようとする意志の表出と市場内で優位な地位を確保するために競争相手に対して挑戦しようとする姿勢を意味する (Lumpkin & Dess 1996)。進取性とは、競争相手よりも、一歩先を進んで市場の変化に対応

し、ビジネスチャンスをつかもうとする起業家の強い意志を表している。結局、起業家精神の構成要素としての進取性の意味は、市場で競争相手より先にビジネスチャンスをつかむとともに、既存の企業に挑戦しようとする意志であると理解できる。

上記の内容からすると、起業家精神の構成要素は、新しい変化を主導する革新性、不確実な将来の結果の覚悟としてのリスクテイク（risk-taking）、そして既存の競争者に臆せず戦っていかうとする進取性の三つであった。この三つの要素を内包していると、起業家精神が形成されている人であると言えるのである。それでは、起業家精神をめぐる研究はどのような形態で展開されてきたのだろうか。起業家精神をめぐる研究の流れを検討する。

4. 起業家精神に関する研究動向

起業家精神に関する本格的な研究は、1980年代のアメリカを中心に展開された。起業家精神の研究の形態を時系列に分析してみると、大きく二つに分けて研究の流れを把握することができる。

第一は、社会心理学的な視点で捉えた研究である。社会心理学的視点から捉えた研究の特徴をみると、起業家の達成欲求、リスクテイク（risk-taking）、起業家自身の家庭環境や人口統計学的要因など、個々の起業家の特性に焦点を当てた研究が大きな比重を占めていた。その中で、代表的な研究社として呼ばれる McClell は、起業家の重要な特性として達成欲求に焦点を合わせて、起業家のリスクテイク（risk-taking）の心理的度合いと個人的価値観が、目標を達成しようとする欲求を左右する変数であると把握した（Hochner & Granrose 1988, Becherer & Maurer 1999）。しかし、これらの起業家精神を社会心理学的視点から捉えた研究では、起業家の具体的な行動、特に組織的な枠組みの中での起業家の行動や意思決定の原因を十分に説明するには不十分であるという

点が問題点として指摘された（Gartner 1988）。

第二の起業家精神に関する研究の流れは、起業家の行動やプロセスに焦点を当てた研究である。この研究では、前述した社会心理学的視点に基づく起業家の個人的な特性や性格を分析するだけでは限界があるという問題意識から、起業家の行動に比重を置いた研究が進められたのである。要するに、新しいビジネスを推進するために、起業を実践した経営者たちの行動を分析し、起業家精神の遠因を探る研究を展開していた。その研究の中で特に重要なことは、起業を実践する過程で、経営者がどのように戦略的思考を形成し、計画を戦略的に策定し、体系的な事業を推進したのかということである（Hitt et al, 2001）。すなわち、起業家の行動を分析することで、起業家精神を形成させる要因を把握しようとしたのである。実際、この研究方法が、社会心理学的視点に基づく方法よりも、今日多く活用されている。

しかし、起業家精神を把握する上での構成要素である「革新性、リスクテイク（risk taking）、進取性」を把握するためには、社会心理学的視点に基づく分析方法と行動分析の方法という両方の視点でアプローチすることが必要であると考えられる。この二つの研究方法を適切に調整することが課題である。そして、もう一つ確認しなければならない論点がある。それは、起業家精神を内包し、実際に起業を実践し、事業を推進する段階まで行動することを可能とする意志は、どのように形成されたのかという点である。

上記の二つの先行研究の枠組みでは、起業家精神を形成する個々の特性という起業家の内在的要因と事業を展開する社会的環境のような外在的要因に基づいて検討されているが、起業を実践する起業家の意志の遠因を探る研究はまだ十分ではない。そのため、起業家精神を具現化する行動を牽引する意志を把握することが課題であると思われる。さらに、起業家精神を実践として展開している起業家の中で、近年、社会的問題をビジネスとして解決しようとする起業

家が増えており、社会的な関心も高い。この視点から言えば、社会貢献や社会問題の解決に関心を示している起業家精神の形成要件と起業に対する意志を探る議論も必要であると考えられる。従って、次項では、起業家精神を持つ人々が実際に起業に至る意志の部分に焦点を当てた研究の流れを把握する。

5. 起業家精神と起業への意志

起業家精神を形成する過程を探るとき、最初に検討すべき課題は、「起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」である。「起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」を最初に検討する理由は、結局、起業とはこの意志の表出 (発現) だからである。すなわち、起業に対する意志を持ち、この意志を行動に移るようになるには、起業家精神が内在されていなければならないからである。このような起業家精神の発現とも言える「起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」に関する研究の動向を見ると、1990年代以降主に展開され始めている。「起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」に関する研究の代表的な例は、Krueger & Brazeal (1994) の研究である。Krueger & Brazealは、起業を实践する意志を起業家精神の形成において最も重要な概念であると把握した。そして、「起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」を、起業という行動の意図的実践として捉え、企業行為の長いプロセスのうち、最初のステップであると認識した。また、Morris (1998) は、「起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」の分析において、様々な属性と変数を挙げながら、「起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」の中核的要素を計量的に分析した。Morris (1998) が分析に活用した属性を具体的にみると、次のように区分できる。

第一の属性は、「富の創造」である。生産活動の促進と関連するリスクを負担する対価として利益を得ることを意味する。第二の属性は、

起業、すなわち、会社を設立する行為そのものについてどれほど興味を持っているのかということである。第三の属性は、技術革新を生み出すために、既存の方式から脱皮し、新しい方法を見つけようとする意志である。第四の属性は、変化に対処しようとする肯定的思考である。特に、与えられた環境の中で、機会を獲得し、活用するために、個人が既に持っていた知識と技術を継続的に進歩させていこうとする学びへの意志である。第五の属性は、どのように雇用を継続的に生み出してくべきかという起業家としての雇用創出への意欲である。第六の属性は、「社会的価値の創造」である。社会貢献を含め、ビジネスを通じて新しい価値を生み出し、ご客や社会に役立つことである。第七の属性は、社会的成長を導く起業家としての使命である。この7つの属性に基づきMorrisは、「起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」の程度を把握することができるかと判断した。この属性は、「起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」を定量的に検討する重要な根拠となっている。実際、今後の研究に基づく内容を検討する中でも、Morris (1998) の属性を基礎として、グローバル社会における起業家精神に必要なとされる属性を追加し、特に、若者を中心に「起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」の程度を分析することを試みる。その内容は、今後の研究の記述の中でさらに詳しく検討していく。

6. 考察

これまで検討した起業家精神をめぐる研究の動向を見ると、起業家精神の形成は、革新性、リスクテイク (risk taking)、進取性の三つの要因を、どのように教育や学習を通じて形成させていくのかに帰結されると思われる。要するに、革新性、リスクテイク (risk taking)、進取性という三つの要因を形成することによって、起業を实践する意志 (entrepreneurial intention)」を持つようになり、起業に実践的

に取り組む人々が増えると考えられるからである。そのため、まずは、「起業を実践する意志 (entrepreneurial intention)」に関する調査を通じて、起業者精神に必要な革新性、リスクテイク (risk taking)、進取性の要因が、調査対象である若者にどの程度内在しており、他にも必要な能力があるのかを検討するための調査を実施する。同時に、起業者精神を形成させる具体的な学習や教育を実施している事例を分析し、定量的な側面と定性的側面で把握することを試みる。さらに、起業者精神を形成させる学習と教育の事例の分析においては、次の二つの側面から検討していく。第一に、現在の展開されている起業者精神を形成するための教育の現状と学習の特徴を把握する。第二に、社会の問題解決に寄与できる新たな価値を生み出し、社会的価値を向上させる起業の意味を考察する。そのために、社会的起業のような社会的価値に重点を置く事業を展開している「起業を実践する意志 (entrepreneurial intention)」の要因と、教育と学習の可能性を検討する。但し、本稿では、その事例研究の根拠となる既存の先行研究の流れを中心に把握している。

参考文献

- ジョン・マッキー・ラジェンドラ・シソーディア (鈴木立哉訳) (2014) 『世界で一番大切にしたい会社、コンシャス・カンパニー』 (Harvard Business School Press) 翔泳社。
- J. A. シュンペーター (清成忠男訳) (1998) 『企業家とは何か』 東洋経済新報社。
- Cole, A. H. *Business Enterprise in its Social Setting*, Harvard University Press 1959. (中川敬一郎訳『経営と社会: 企業者史学序説』ダイヤモンド社1965.)
- Becherer, R. C., & Maurer, J. G. (1999). The proactive personality disposition and entrepreneurial behavior among small company presidents. *Journal of Small Business Management* (38), pp.28-36.
- Bygrave, W.D. (1993). Theory building in the entrepreneur paradigm. *Journal of Business Venturing* 8(3), pp.255-280.
- Covin, J. G., & Slevin, D. P. (1989). Strategic management of small firms in hostile and benign environments. *Strategic Management Journal* (10), pp. 75-87.
- Dollinger, M. (1995). *Entrepreneurship: Strategies and Resources*. First edition. Flossmoor IL: Irwin/Austen Press.
- Gartner, W. B. (1988). "Who is an entrepreneur?" is the wrong question. *American Journal of Small Business* 12(4), pp.11-32.
- Hitt, M. A., Nixon, R. D., Hoskisson, R. E., and Kochhar, R. (1999). Corporate entrepreneurship and cross-functional fertilization: Activation, process, and disintegration of a new product design team. *Entrepreneurship Theory and Practice*, 23(3) pp.145-67.
- Hochner, A., & Granrose, C. S. (1985). Sources of motivation to choose employee ownership as an alternative to job loss. *Academy of Management Journal* (28), pp.860-875.
- Kuratko, D. F. & Hodgetts, R. M. (2004). *Entrepreneurship: Theory, Process, Practice* (Mason, OH: South-Western Publishers.
- Krueger NF, Brazeal D (1994) Entrepreneurial potential and potential entrepreneurs. *Entrepreneurship Theory and Practice* (18), pp.91-104.
- Lumpkin, G. T., & Dess, G. G. (1996). Clarifying the entrepreneurial orientation construct and linking it to performance. *Academy of Management Review*, 21(1), pp.135-172.
- Miller, D. (1983). The correlates of entrepreneurship in three types of firms. *Management Science* (29), pp.770-791.
- Morris, M. H. (1998). *Entrepreneurial intensity: Sustainable advantages for individuals, organisations and societies*. Westport, ct: Quorum.
- Sexton, D. & Bowman-Upton, N. (1991). *Entrepreneurship: Creativity and growth*. New York: Macmillan.
- Shapero, A. (1981). Self-renewing economies. *Economic Development Commentary*. 5 (Apr.), 19-22
- Stevenson, H. H., Roberts, M. J., Grousbeck, H. I. (1989). *Business ventures and the entrepreneur*, Homewood, IL, Richard D Irwin Publishing
- Stevenson, H. H. and J. C. Jarillo (1990). 'A paradigm of entrepreneurship: Entrepreneurial management', *Strategic Management Journal*, (11), pp. 17-27.
- Timmons J. A., (1994). *New Venture Creation: entrepreneurship for the 21st century*, Chicago, Irwin.